

平成三十一年三月吉日初版作成

すべては完璧、欠けたる
ものなし、大成就

高嶋善三郎

目次

- 生命の法則の大調和精神にそって生きる・・・3
- 相反するものが大調和する・・・5
- 神界に刻印された言霊・・・6

お願い

より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。例えば、この点について分かりにくいとか、どの点が心に響いたとか、新しい疑問があるなど、何でも結構です。お聞かせください。また、送られてきた資料が次回以降不要の場合は、次のケータイのSMSか、アドレスにご連絡ください。

(ケータイ) 09033466619

(アドレス) zensan@peach.ocn.ne.jp

生命の法則の大調和精神にそって生きる

今の自分が神の中に入ることの必要性は、既に理解できたことですが、どうしても分別する心やそれにより生み出された暗黒想念が消えてゆく時に把われやすいことは、誰もが経験することあります。

眼で見、耳で聞き、想いで分別し、認識しようとする心、善悪を判断しようとすることは大調和していく上で、何故好ましくないのでしょうかという質問がありました。この質問に対する答を整理します。

この答を考えるにあたって参考になるのが、老子講義の二十講（道は一を生ずる）です。

その中で生命の法則の大調和精神にそって生きるにはどうすればよいかを教えてください。

●宇宙に充ち充ちている大生命が、万物を生みなそうとする力を働かしめるために一なる宇宙の心つまり宇宙心として、絶対者の一としてその生みの力を結集した。

●絶対なる一というものは、無限の縦と横、無限の⊕⊖をうちに持った宇宙心である。その宇宙心が、働きを縦横、陽と陰、⊕⊖の二つに分けた。この二つに分かれた働きが相互に働きかけ、三が生じて、三は万物を生じた。万物はすべて陰陽の原理、⊕⊖の交流の原理によって生じている。つまり、

万物は陰を負い、陽を抱いている。しかし陽といい陰といい、⊕⊖といっても陽中陰あり、陰中陽あり、というように陽の中にも陰があり、陰の中にも陽があるのであり、⊕の中にもマイナスがあり、⊖の中にもプラスがあるのである。

●宇宙心というのは、宇宙科学的に云えば、宇宙核を通して天地を通して天地を貫いて働いている。もっと云い方を変えると、絶対の一なる宇宙心のひびきは、最も微妙なる縦なる働き、活動している宇宙子（心）の一にもそのひびきを伝えていると同時に、横なる静止している宇宙子（物質）の一にも働いている。しかしその働きかけ方は、絶対なる一は、根源的な無限大の二として、縦横、陰陽、⊕⊖の働きの二つに分かれて働きかける。だから絶対の一なる宇宙心は、大小無限の数をうちに有するのであり、それらの活動力の源泉として存在しているのであって、実際の働きは二と分かれた宇宙心のみ心によってなされる。

●人間の構造はそのまま複雑なものであって、神のみ心のままの人となって、この地球界で生活してゆくには、余程深く、宇宙法則の真理を知らねばならぬのである。いわゆる宇宙心の在り方を知らねばならない。その心は自然の心そのままということであり、人心に当てはめていえば、自己を虚しくした、自然の気と合致した心をいうのだ。これをやさしくいえば、陰陽、⊕⊖、縦横という、相反する性質のものが、宇宙心の法則にのったそのままの在り方で交流し合い、

交叉し合い、融合し合い、離合集散し合うことが、大自然の調和なのであり、その姿が、沖氣以て和を為す、というのである。

●この世界というものは、すべてにおいて相反するようになれるものの和合によって成り立っているのであり、物質にしても何にしても、損をする者があれば得するものがある。益したと思っているうちに、いつの間にか損をしている時もある。そういう状態を人は常に自他の生活の中で教えられている。この表面に現われていることを土台にして、だから、損だとか得だとか、幸だとか不幸だとかという、そうした現象面にだけ扱われないで、もっと奥底の生命自体の在り方、宇宙神のみ心に合わせて生活してゆくことが必要なのだ。

●王侯ともなれば、実際的にはすべてに恵まれていて、人々の嫌がるような状態の名号とは全く反対の生活をしている。そうした恵まれた自分の状態に慣れ親しんでしまっていると、恵まれない社会の人々の心が判らなくなってしまう。そこで、常に貧しい恵まれない社会の人々の上に自分の心が及んでいくように、常にその人々のことが気がかりになるようにと、自分の号にそうした恵まれない貧しい状態を現わす号をつけて、自らの反省にしているのであると同時に、自らの心の中で富と貧と幸と不幸という相反するものの調和を計る指針としていのである。

●世の中には、人間の在り方というものを、少しも考えずに、

唯肉体身として存在している自己の金力や地位力や権力のみに頼って、神の大調和精神を全く離れた生き方をしている人（強梁者・きょうりょうしゃ）がいる。そうした力が通用しているうちは、御当人は鼻高々と生きているが、真理を知っている者の眼からみると、実に気の毒な、哀れな人に見えてくる。それは、その人が慢心の日々を重ねてゆくに従って、その人の苦悩に充ちた未来の姿が濃厚に現われてくるからである。強梁者の肉体の消滅は、死後の世界における暗黒苦悩の生活がそこに画かれつつけてゆくのであって、少しの安らぎも、安穩も見出すことができないのである。こうした生き方をしてはいけないということを、教えの父、教えの最大のものとしてゆこう。

●神道などでは、絶対の一なる宇宙神（心）を天御中主大神（あめのみなかぬしのおおがみ）と称え、二なる宇宙心を、高御産巢日（たかみむすびの）神、神産巢日（かみむすびの）神というように、一神の次ぎに陰陽二神の名をつけている。そして次に、三神の名をあげている。この陰陽二神は、宇宙大の陰陽から、電子、中間子、宇宙子の極微の陰陽 $\oplus\ominus$ の中にまでその働きの権能を有（も）つのである。しかしながら、この陰陽、 $\oplus\ominus$ が如何なる力をもつとしても、その働きを別々な形でしているうちは、宇宙世界には、何物の変化も表現も行なわれないのである。この二なる原理が、この二神の働きが相互に働きかけた時、そこに三が生じるのである。三が生

じて、はじめて、この宇宙世界に宇宙神、つまり道、絶対なる一のみ働きが表現されてゆく。

相反するものが大調和する

以上の中から、最も注目すべきは、「この世界というものは、すべてにおいて相反するように見えるものの和合によって成り立っているのであり、物質にしても何にしても、損をする者があれば得するものがある。得したと思っっているうちに、いつの間にか損をしている時もある。そういう状態を人は常に自他の生活の中で教えられている。この表面に現われていることを土台にして、だから、損だとか得だとか、幸だとか不幸だとかという、そうした現象面にだけ把われないで、もっと奥底の生命自体の在り方、宇宙神のみ心に合わせて生活してゆくことが必要なのだ」と言われているところです。

そして、相反するもの、即ち物質の世界と心の世界とが縦横十字に大調和して、神のみ心が全き姿をそこに現されようとしている、アセンションを目の前に行っている我々人類に対して言われているように考えられるところが、この箇所です。「この陰陽、⊕⊖が如何なる力をもつとしても、その働きを別々な形でしているうちは、宇宙世界には、何物の変化も表現も行なわれないのである。」「これはどうということか」と、物質

世界を象徴する分別する心と、心の世界（永遠の生命）を象徴する本来心が一つにならなければ、それは実現されない。即ち分別心しか認めない人は、神の全き姿をそこに現すことができないし、また本来心だけを認めてもこの世界に神の全き姿をそこに現すことができないということなのです。この二つの心が相互に働きかけたとき、即ちお互いに働きを認めたととき、神のみ心が全き姿をそこに現されるのです。

私たちは肉体の経験（視点）から即ち現象面から捉え、良い悪いと判断しているということなのです。私たちが大調和の世界を現わしていくためにもっと奥底の生命自体の在り方、宇宙神のみ心に合わせて生活してゆくことが必要なのです。自己という一つの生命の流れは、奥深いところから、浅い狭いところまで、無限の段階において働きつづけているのです。浅い狭い肉体頭脳という場所だけを経巡っているような想念や知識をいくら振り廻していても、大宇宙の法則に乗り切ることにはできない、大宇宙の法則に乗って生きてゆかなければ、この狭い肉体世界での生き方さえ正しく行じてゆけないということが分かります。

そして最初の質問に対する答えは、分別心が単独に好ましかどうかではなく、本来心（永遠の生命）と一体となっていないことが好ましくないということになります。長年分別心しか存在しないと錯覚してきた私たちは、守護の神霊の助け

によって本来心の中に入ることに慣れるまでは、分別心が好ましくないと感じるのですが、本来心の中に入ることに慣れてくると、この肉体世界に神性（聖）を顕現していく上で、分別心は重要な要素であることに気づくのです。より具体的にいえば、自分のすべての欠点を愛おしく受け入れ、輝かせることが出来るようになるということです。

神界に刻印された言霊

日本という国は、言霊を大切にしてその力に助けられ、繁栄してきた国なのであります。

柿本人麻呂は、敷島の 日本（やまと）の国は 言霊の佑（さき）はふ国ぞ真幸（まさき）くありこそと、即ち日本（やまと）の国は、言霊に助けられ、人々は幸福になってきた、まことに幸いなことにと歌っています。

また五井先生は、「神道でいう言霊は、各神霊の光の働きを説いている。アオウエイ（アイウエオ）の母音は、五直霊（命）のこと。この言霊がはっきりこの肉体界に、そのままのひびきを現わせば、この地球界に神界が出現するのであるが、今のところ業想念（自我欲望）が邪魔していて、神々のみ心はそのまま現れていない。」と言われています。これらのように言霊を大切にし、その力を発揮させることは、私たち日本人にとって天命を完うする上において極めて大切なことなのです。

最近言霊の偉力関連の書物をみていましたら、興味深い力タカムナの本に出会いました。

カタカムナは、今から1万2000年前から5500年前の間、カタカムナ人によって神代文字で記され、兵庫県六甲山系の金鳥山にあるカタカムナ神社のご神体として秘蔵されてきたもので、80首の五・七調の文章（ウタヒ）で構成されています。そのうちの次の三首を唱えると自分を中心として2・5メートルの光の玉が現れると言われているのです。カタカムナウタヒの内第七首は、五井先生のお言葉にもある造化三神にふれた言霊があります。

ヒフミヨイ マワリテメクル ムナヤコト アウノスヘシレ
カタチサキ（第五首）

ソラニモロケセ ユエ又オヲ ハエツヰネホン カタカムナ
（第六首）

マカタマノ アメノミナカ又シ タカミムスヒ カムミムス
ヒ ミスマルノタマ（第七首）

医師でカタカムナの研究者である丸山修寛氏によると、まがたまは、陰陽の働きを象徴するもので、まがたまの形と同

じ形の、目に見えない波動がそこに存在しており、その二つが一つになって働く、別の言葉でいえば、右回りの渦（陽）と左回りの渦（陰）が一つになったとき、光の玉は現れると言われています。この光の玉によって、現代でも治療が難しいガンなどの病気を治療して大きな成果を得ていると丸山氏は、公表しています。

ところで、私たち神人にとって、重要な言霊があります。2012年7月大行事の大成就を果たした結果、これから生ずる大災難（政治経済の低迷、宗教対立、民族紛争、国家間戦争、疫病、原爆、テロ、あらゆる人智、あくなき欲望にて作り出してきた大カルマによる）を救いうる神力が調ったという秘神示を、昌美先生を通していただいたことを思い出していただきたいのです。

そして2012年2013年の両年において神界に会員各人が昌美先生のご指導のもと「すべては完璧 欠けたるものなし 大成就」という言霊を刻印させていただきました。この言霊を発することにより、宇宙神から富士聖地に降ろされた無限なる光を必要に応じ受け取ることを約束されたのであります。

「すべては完璧、欠けたるものなし、大成就」と唱えた時私たちは宇宙の法則に乗り、本来心の中に入り、光を放ち、暗黒想念を光に還元していけるのです。

ある法友から、この言霊を唱えたら、何故このことが可能になるのですかと質問がありました。

それは、端的に言えば、世界平和の祈り言と同じように、五井先生、昌美先生と神界との約束言であり、唱えた時、光明が降ろされてくることを意味します。

またこの言（ことば）自体に大調和を引き寄せられる力があると言えます。例えば、幸運を引き寄せられるには、幸運になりたいという願いより今の自分は幸運であるという確信することだといわれています。これは、願うことは今の自分が幸運でないことを認めていて、確信することは、今の自分が幸運であることを認めているからであり、認めたものはすべて現れるという法則によるものです。

現在どんなに苦労していても、これはすべてうまくいっていると確信することがいかに大切なのか分かります。これは、老子講義で説かれている現象面から物事をみるのではなく、生命自体の在り方からみるべきという老子の説く真理でもあります。

瞑想統一する時また、トラブルに遭遇した時、この言を唱えると、物質の世界と心の世界とが縦横十字に大調和している自分にもどっていることを実感できるのではないのでしょうか。